

熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター

2020年8月7日



No. 46

イベント情報（令和2年8月～11月）

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

第1回企画展 『レッドデータブックくまもと2019』の動物たち

○開催期間：令和2年7月28日（火）～10月11日（日）

昨年、10年ぶりに熊本県のレッドデータブックが改訂されました。この本で紹介されている生物たちは、開発や外来種の侵入、乱獲などによって絶滅が心配されています。今回の企画展ではレッドデータブックに掲載されている県内の貴重な動物たちを、当センター所蔵の標本資料を用いて紹介します。



クロツラヘラサギ



アマクササンショウウオ



オオルリシジミ

第2回企画展 「わらといのり ～民俗写真家の眼差し～」

○開催期間：令和2年9月8日（火）～10月11日（日）

わらは身近な素材として、様々な場面で利用されてきました。しかし、農業の変化や新素材の登場によって、仕事や日常生活の中からわらは姿を消しつつあります。一方で、祭や行事、儀礼などで用いられる飾りや供え物には、現在でもわらが使われつづけています。今回の展示では、現在まで人々の祈りを形にしてきたわらの祭祀具に注目し、民俗研究家の白石巖氏が残した膨大な写真資料の中から、熊本県内のわらの飾りや供え物の写真を紹介します。



↑ 水神祭り（上益城郡御船町滝尾）

← カワマツリの供え物（熊本市弓削町山尻）

～ご来館の皆様へのお願い～

- 入館の際はマスクの着用をお願いします。
- 入館時に、設置している消毒液による手指の消毒をお願いします。
- 氏名・連絡先、健康状態の記入をお願いします。※感染症拡大防止策以外の目的では使用しません。
- 館内では、周囲の人と2m程度の間隔を取ってください。
- 展示室の最大人数を10人程度とするために、入場をお待ちいただく場合があります。

No. 239
動物

ミナミメダカ *Oryzias latipes* (メダカ科)

日本のメダカは近年、遺伝学的な分類手法によって、キタノメダカとミナミメダカの2種に分けられました。九州にはミナミメダカ（写真1）のみが分布していて、有明型や薩摩型など、遺伝的に異なるいくつかの地域集団に分かれていることが知られています。

日本人にとって最も身近な魚の一つであった“メダカ”が全国的に減少し、1999年に環境庁（当時）がレッドリストに絶滅危惧Ⅱ類として掲載した際には、ニュースや新聞でも大きく報じられました。減少の要因として、農薬による水質汚染や水路の三面コンクリート化、競合種となるカダヤシの侵入などが指摘されています。さらに近年では、ヒメダカなどの改良品種に加えて野生種も愛玩用・教材用に広く流通しており、これらの逸出や遺棄、あるいは“保全”と称して行われている放流により、在来の地域集団に遺伝的攪乱が起きている事も問題となっています。

写真2の標本は、宇城市の農業用水路で採集されたものです。「レッドデータブックくまもと2019」では準絶滅危惧とされ、県内全域で環境悪化などにより減少しているとされています。（中藺 洋行）



写真1 ミナミメダカ（宇城市産飼育個体）



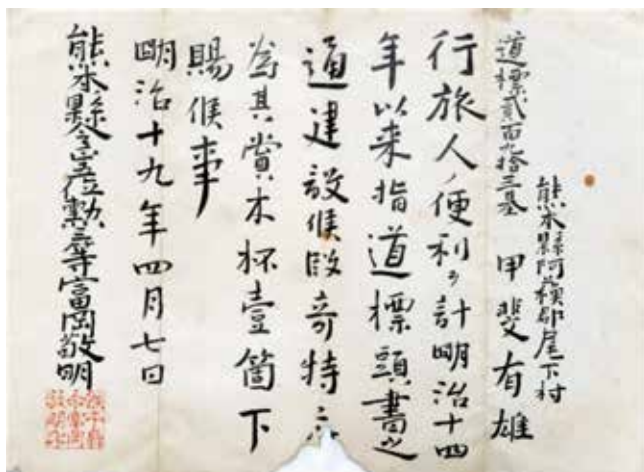
写真2 ミナミメダカ標本（宇城市産）

No. 240
歴史

褒賞状 (高森町瀬井家資料)

阿蘇郡尾下村（現・高森町）出身の甲斐有雄は、石工を生業とする傍ら、阿蘇を中心とした地域に石道標の建設をおこなった人物です。石道標の建設は文久元年（1861）からおおよそ50年にわたって独力で続けられ、明治41年（1908）までに1900基もの道標が建てられたといわれます。

写真の褒賞状は、明治19年（1886）に熊本県から有雄に贈られ、子孫である瀬井家に伝えられたものです。内容は明治14年（1881）以来293基の道標を建設したことに対する褒賞となっており、旅人の便利のために道標を建設したことは奇特（優れたおこない）である、として木杯1個を与える旨が記されています。



熊本県から贈られた褒賞状

有雄の長年にわたる道標建設に対しては、すでに慶応2年（1866）から数回にわたって熊本藩や白川県、熊本県から褒賞されており、その度に金銭や銀杯が褒賞状とともに与えられました。また、明治35年（1902）には宮崎県西臼杵郡にも道標を建てたことで宮崎県からも褒賞されています。この一連の功績から昭和33年（1958）には熊本県近代文化功労者として顕彰されています。

有雄が行った道標建設という取り組みは、瀬井家資料に残されたこれらの褒賞の記録をはじめとする資料によって今に伝えられています。（古澤 広大）

No. 241
植 物

ハマボウ *Hibiscus hamabo* (アオイ科)

頻^{ひん}繁に海の水がかかるような海岸環境は、日差し、風、乾燥、塩分条件が厳しく、植物にとっては生育しにくい不安定な環境です。そのような環境は、樹木よりも草本^{そうほん}の方が生育に適しているようです。その中で、ハマボウは海岸環境に生育する数少ない樹木の一つです（写真 1）。ハマボウは、河口、内湾、汽水湖沼^{きすいこしう}の岸のような、海水あるいは海水が混じる環境の水辺に生育し、半マングローブ植物などと呼ばれることもあります。幹はそれほど高くなりず、枝分かれし、時に這うように伸びるので、丸い樹形になります。円形に近い葉には両面に毛があり、裏面は特に毛が多いため灰白色に見えます（写真 2）。夏に咲く花は、直径 5cm 程の大きさになり、5 枚の花弁は鮮やかな黄色で、とても目立ちます（写真 3）。

写真 4 の標本は、天草市の樋島^{ひのしま}で採集されたもので、1971 年におこなわれた樋島の植生調査で得られた標本の一つです。この調査で集められた標本が当センターにおさめられており、当時の樋島の植生をうかがい知ることのできる貴重な標本群となっています。（前田 哲弥）



写真 1 天草市新和町のハマボウ群生地



写真 3 ハマボウの花
花の中央は赤い



写真 2 表の毛（左）と
裏の毛（右）



写真 4 ハマボウの標本

No. 242
地 学

ほうかいせき
方解石

方解石は、地球上で多く産出する炭酸カルシウムの鉱物です。方解石の結晶は一般的に平行四辺形で囲まれた菱^{りょうめんたい}面体や、他にも先のとがった犬牙状^{けんがじょう}や釘の頭のような釘頭状^{ていとうじょう}、板状など色々な形のものがあります。

写真 1 は、宇城市豊野町水昌山^{すいしょうざん}で採取した方解石の結晶です。この結晶は六角柱状で一見すると水晶（石英）の結晶のようですが、うすい塩酸をかけると激しく発泡するので、方解石だとわかります。

水昌山では、東西方向の嶺に沿って、方解石の結晶が集まってできた結晶質石灰岩が分布しています。水昌山の結晶質石灰岩は、細かい方解石の結晶が集まった白い岩石がほとんどですが、一部の場所では写真 1 のような六角柱状の結晶が集まっています。

方解石の中にはブラックライトで紫外線を当てると光るもの（蛍光^{けいこう}）があります。有名なのはマンガンを含んだ方解石で、赤～オレンジ色に光ります。水昌山の方解石は、写真 2 のように白く光ります。このように、同じ鉱物でも色や反応が異なったり、蛍光しないものがあったりします。

蛍光する鉱物は他にもありますので、身近な石で試してみたいかたがでしょうか。ただし、紫外線を直接見ないように気をつけましょう。（廣田 志乃）



写真 1 水昌山の方解石

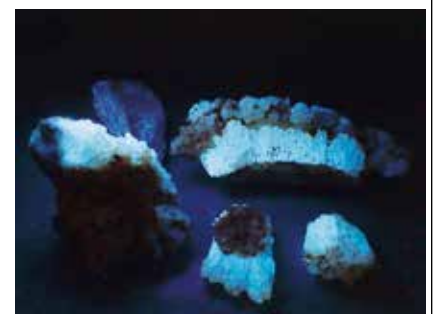


写真 2 水昌山の方解石（蛍光）

No. 243
民 俗

カワマツリの供え物



写真1 オタル



写真2 分田のカワマツリの様子

田植えが終わった頃から夏の土用にかけて、県内各地の水辺ではカワマツリと呼ばれる行事が行われます。水神への豊作祈願という側面もありますが、水遊びをする子どもたちにカッパが悪さをしないように祈るという所が多いようです。カッパは河川や沼、池、海など水界に住むとされる妖怪で、県内ではガラッパ・ガワッパ・カワワロなどと呼ばれ、様々な昔話や伝説が残されています。カワマツリではカッパの好物とされるきゅうりなどの夏野菜やそうめん、せんべい、魚の干物などと、カケグリ・カックリ・タカンポなどと呼ばれる竹で作ったお酒入れを笹竹に下げて水辺に立てて供えることが多いようです。また、稲や麦のわらで様々な形のものを作るところもあります。

写真1は山鹿市鹿本町分田地区のカワマツリ（行事日：7月20日）の供え物です。麦わらと竹で作られたこれはオタルと呼ばれ、祝いの酒を持っていくときに使う角樽つのだるを模しています。オタルになすときゅうりの輪切りを竹串で刺し、さらにオタル本体を竹に吊り下げます。竹の先端には、米・塩・いりこを半紙に包んだものはさみこみ、集落を流れる沢のほとりに立てて、子どもたちの水難事故防止と田の水が不足しないように祈ります。わらで角樽を模したものを作るところは熊本市周辺から宇城市にかけ広く見られます。

写真3は益城町広崎地区のカワマツリ（行事日：夏の土用三日目）の供え物です。稲わらの苞つとに足をつけたような形状のこれはタコと呼ばれ、中にカッパの好物とされるそうめんや野菜をつめて、秋津川の土手に組んだ真竹に下げ、子どもたちの水難事故がないように祈ります。中に野菜などを詰めたわら苞たこを供えるのは県内で広く見られますが、これを海の蛸の形に作るのは緑川水系の地域でよく見られます。ただしその理由は分かっていません。

ほかにもわら舟やわら人形を下げるところもあり、供え物には県内で様々な特色がみられます。（迫田 久美子）



写真3 タコ



写真4 益城町広崎のカワマツリの様子

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869 - 0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL : 0964 - 34 - 3301 FAX : 0964 - 34 - 3302

E-mail : hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP : <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由

八代市役所行き「希望の里入口」下車

○J R

松橋駅より約 3 km



熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター

2020年10月30日



No. 47

イベント情報 (令和2年11月～令和3年1月)

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

第3回企画展 「知ってる!?知らない!?鉱物のいろいろ!!」

○開催期間：令和2年10月20日(火)～12月27日(日)

鉱物と聞いただけではよく分からない人もいるかもしれません。鉱物は、宝飾品や工業製品などの原料として使われており、意外と身近なものです。また、そのようには活用されていない鉱物も地球を構成する要素の一つです。

この展示では、鉱物のできる場所やでき方、鉱物の物理性質や特徴的な性質などの基本的な事柄について説明します。また、変わった形の鉱物や鉱物にまつわる話も紹介します。

いつもの光で見た時 紫外線ライトをあてた時



めのう



けいさんあえんこう
珪酸亜鉛鉱



蛍石



らんてつこう おか
藍鉄鉱に置き換わった植物化石

第4回企画展 「ちょっと昔の暮らし探検 XI」

○開催期間：令和3年1月11日(月)～3月14日(日)

小学校3年生の社会科で習う道具を中心に昔懐かしい暮らしの様子や仕事の道具を一堂に紹介します。昭和30年代から40年代までは普通に使われていた、でも最近ではすっかり目にしなくなった道具を展示します。



～ご来館の皆様へのお願い～

- 入館の際はマスクの着用をお願いします。
- 入館時に、設置している消毒液による手指の消毒をお願いします。
- 氏名・連絡先、健康状態の記入をお願いします。※感染症拡大防止策以外の目的では使用しません。
- 館内では、周囲の人と2m程度の間隔を取ってください。
- 展示室の最大人数を10人程度とするために、入場をお待ちいただく場合があります。

No. 244
民 俗

十五夜綱引きの綱

熊本県の南部では旧暦 8 月 15 日の十五夜に綱引きを行うところがあります。十五夜は里芋など畑作物の収穫祭の意味があると考えられていますが、綱引きを行うところでは綱を蛇や龍に見立て、とぐろを巻いた綱にお供え物をします。蛇や龍は水の神様で祓いや清めの力があると考えられており、子ども達が綱を持って集落を廻るところもあります。

写真 1 は上天草市大矢野町女鹿串の綱引きの綱です。はっきりと龍を模して作るのは県内では珍しいものです。材料は稲藁、棕櫚の皮、枇杷の葉で、龍の目と舌は厚紙に赤いビニールテープを巻いて作られています。写真 1 の綱の長さは 5m ほどですが、かつては 15m くらいの綱を作っていたそうです。

女鹿串の十五夜綱引きは月が出る頃から行われます。龍の頭を月に向けてとぐろを巻いた綱にすすきや饅頭などを供え、とぐろの中に 15 才の男の子が入って月に拝したら、子ども達が綱を持ち「マイコンダー、マイコンダー、フクノカミガマイコンダー」と言いながら家々を廻り（写真 2）、その後、集落の広場で綱引きと子ども相撲が行われます。持ち帰った綱の一部を柿やみかんなど果物の木にさげると実がよくなるといわれます。（迫田久美子）



写真 1 十五夜の綱



写真 2 綱を持って集落を廻る様子

No. 245
動 物

ヒゴキムラグモ *Heptathela higoensis* (ハラフシグモ科)

キムラグモ類はハラフシグモ科に分類されるクモの一群で、国内では九州から南西諸島にかけて 10 種前後が分布しています。腹部の背面には「ハラフシグモ」の名の由来となる体節の名残があり（写真 1）、同じ特徴を持ったクモの化石が古生代石炭紀の地層で見つかっていることから、「生きている化石」とも呼ばれています。

キムラグモ類はいずれも林縁などの崖地に生息し、扉のような蓋のある巣穴に潜んで、近くを通る虫などを捕食しています（写真 2）。一般的なクモに比べて移動分散能力が低いいため、地域ごとに別々の種に分かれているのですが、分類がまだ整理されておらず、「レッドデータブックくまもと 2019」でも「キムラグモ類」として準絶滅危惧に選定されています。

写真 3 の標本は、宇城市の照葉樹林で採集されたものです。残念ながら採集の数ヶ月後には重機が入り、生息地ごと消滅してしまいましたが、その地に本種が生息していたことを証明する貴重な資料となっています。（中藺洋行）



写真 1 ヒゴキムラグモ（左）とキノボリタテグモ（右）の腹部



写真 3 ヒゴキムラグモ標本(宇城市)



写真 2 巣穴に潜むヒゴキムラグモ（熊本市）

No.246
歴史

るいよせとうしよもくろく
類寄頭書目録 (宇城市小田家資料)



写真1 抜書における記載年代と内容

本資料は、宇城市小田家資料に保管されていた「河江旧記抜書」という資料の索引目録です。「河江旧記抜書」とは、江戸時代の熊本藩の地域行政機構である河江手永（現在の宇城市松橋町・小川町を管轄）に熊本藩庁の諸機関から出された通達やお触れ、手永業務の中で作成された記録などが一定の期間及び特定の項目ごとに収録された行政記録です。

本資料の冒頭には、「抜書」の巻数ごとに記載された年代とその内容が書かれ、例えば、第2巻の記載内容を見ると、「^{めいわ}明和元二三四五六七八 ^{おふれじょううつし}御触状写」（写真1）とあることから、「抜書」の第2巻には、明和元年（1764）から明和8年（1771）までの御触状の写しが書かれているということがわかります。次に、3840 通分の行政記録が 140 項目に分類され、その項目ごとに「抜書」における巻数と掲載番号及び表題名が掲載されています（写真2）。

140 項目の見出しや掲載されている文書表題には、河江手永の地域や村々に関する広範な事項が見られます。本資料は、これらの事項が「抜書」のどこに記載されているのかを効率よく調べることができるツールであり、また、藩や手永の記録の変遷を容易にたどることを可能にしたものであるといえます。（堤将太）



写真2 項目ごとの掲載内容

No.247
植物

モロコシソウ *Lysimachia sikokiana* (サクラソウ科)



写真1 モロコシソウの裂開した果実
2009年6月16日
撮影、甲佐岳。

モロコシソウは、温暖な地域の林内に生育する多年草です。葉は互生で、葉先と葉脚がとがった、卵形の葉です。夏には茎の上部の葉の付け根から細長い柄が伸び、その先に黄色い花が一つ咲きます。果実は熟すと灰白色になって5裂し、まるで白い花のように見えます（写真1）。和名モロコシソウの由来は、「唐土（もろこし：中国を指す古い呼び名）」、つまり外国からきた植物と考えられたことによります。しかし、実際は、モロコシソウは日本では関東地方から沖縄県まで自生する、日本の在来の植物です。

写真2の標本は、1960年に球磨郡で前原勘次郎氏（1890-1975）によって採集されたものです。彼は、県立人吉高等女学校などに勤務しつつ植物の研究も進めた人物で、南九州の植物研究史上重要な文献である『南肥植物誌』を出版しました。彼が作成した標本は、学術的に利用されたものも多く、全国の主要な大学や博物館にも収められており、当センターにも約40点の維管束植物標本が収蔵されています。この標本はその中の一つです。

また、人吉城歴史館には彼が作成した標本約33,000点が収蔵されています。それらは「令和2年7月豪雨」による球磨川の氾濫で浸水被害を受け、現在、当センターを含めた全国30余の大学、博物館等の協力で、洗浄や乾燥の処理が進められています。（前田哲弥）



写真2 モロコシソウの標本

No. 248
地 学

やまこうがわりゅうもんがんに
山甲川流紋岩類

阿蘇郡小国町西部、杖立川左岸の山は、台形のような地形をしています（メサ地形）。このメサ地形を作っているのは、山甲川流紋岩類と呼ばれる火山噴出物です。

山甲川流紋岩類は、溶岩と火山の噴火で噴き出した物が固まってできた火砕岩からなる約 100m の厚さの岩体です。岩体の最下部と上部は流れ模様（流理構造）の発達した流紋岩で、下部は軽石の層、中部は流紋岩質の溶岩や火砕岩です。このうち、メサ地形の台地面を流れる山甲川には、上部の流紋岩溶岩が分布しており、河床では流理構造が発達した岩石を見ることができます（写真 1）。



写真 1 山甲川河床に露出する流紋岩

山甲川河床では見た目の面白い岩石が見られます。その 1 つが、写真 2 の球顆玻璃斑岩です。多数

の丸い粒（球顆）が集まってできており、すき間は黒曜岩（ガラス質の岩石）で埋められています。なお、この資料は「熊本の自然と文化」No. 31 で紹介しています。2 つめは写真 3 の黒曜岩です。黒い岩石全体にクリストバル石の白い斑点がちりばめられた、「スノーフレーク・オブシディアン（雪片黒曜岩）」と呼ばれるものです。写真 4 の岩石は黒曜岩（写真 3）に似ていますが、写真左上の拡大写真を見ると、クリストバル石や長石が放射状に集まってできた灰色の球顆と白く透明な鉱物（石英や長石）の粒が黒曜岩の中に入っています。このような岩石を黒曜岩質玻璃斑岩といいます。



写真 2 球顆玻璃斑岩（No. 31 より）

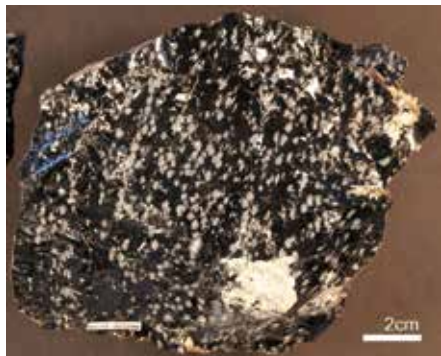


写真 3 黒曜岩

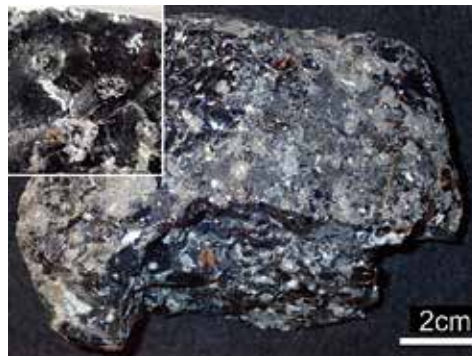


写真 4 黒曜岩質玻璃斑岩

これらは同じマグマが冷えてできた岩石ですが、冷え固まる時の条件の違いによって、見た目が異なってきます。このような違いは他の火山地域でも見られますので、探してみてもいいかもしれません。（廣田志乃）

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL : 0964-34-3301 FAX : 0964-34-3302

E-mail : hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP : <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由

八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km



熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2021年3月26日



No. 48

イベント情報（令和3年3月～令和3年6月）

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

入場無料

第5回企画展 「海辺の植物」

○開催期間：令和3年3月30日（火）～5月30日（日）



ハマボウの標本（博物館ネットワークセンター所蔵）

夏になると恋しくなる海辺ですが、海の水の塩分、強い日差しによる高温と乾燥、波や風で絶えず動かされる地面など、植物にとっては過酷な環境です。そこで生活する植物たちは、その過酷な環境を乗り越える様々な特徴を持っています。また、熊本県の海岸には、干潟・砂浜・岩石海岸など多様な環境があり、それぞれの環境に適応した植物が生育しています。

この展示では、熊本県の海岸とそこに生育する海辺の植物たちを、当センター所蔵の標本や写真で紹介します。



ハマボウの花

ツルナの花

移動体験教室・講師派遣

博物館ネットワークセンターでは、学校や PTA 活動、子ども会活動などで利用できる、移動体験教室を行っています。また、学校や教育施設等への職員の講師派遣も受け付けています。詳細は博物館ネットワークセンターホームページをご覧ください。

＜移動体験教室プログラム＞ 化石レプリカを作ろう・貝殻クラフト・葉脈標本でしおりを作ろう・古銭レプリカを作ろう・石臼できな粉団子づくりなど。

ご来館の皆様へのお願い ～新型コロナウイルス感染症対策について～

- 入館の際はマスクの着用をお願いします。
- 入館時に、設置している消毒液による手指の消毒をお願いします。
- 氏名・連絡先、健康状態の記入をお願いします。※感染症拡大防止策以外の目的では使用しません。
- 館内では、周囲の人と 2m 程度の間隔を取ってください。
- 展示室の最大人数を 10 人程度とするために、入室をお待ちいただく場合があります。

No. 249
植 物

ハマナツメ *Paliurus ramosissimus* (クロウメモドキ科)



図1 天草市で採集されたハマナツメ



図2 ハマナツメの果実
a: 上面 b: 下面 c: 側面

海岸近くの林に生える落葉性の低木です。熊本県では、水俣市、天草市、上天草市などでの生育が確認されています。図1の標本は天草市で採集されました。同科別属のナツメ *Ziziphus jujuba* に似ていることからついた和名のようです。葉は4cm前後のやや広い卵型で、縁には小さな鋸歯があります。葉の脈は1本の主脈と2本の側脈が目立つ「三行脈」です。この葉脈の特徴はナツメにも見られます。

一方、果実はお皿を伏したような形の乾果で、その縁は三裂し翼状に広がります(図2)。食用となるナツメの果実(液果)とは全く似ていません。このハマナツメの果実は固く、乾燥しており、熟しても裂けたり、割れたりして種子が出てくることはありません。そのため、軽くて海水に浮き、種子を塩分濃度の高い塩水から守ることができます。ハマナツメは種子を遠くへ運ぶのに海の水の動きを利用しているのです。

ハマナツメは、「レッドデータブックくまもと2019」では、絶滅危惧Ⅱ類(VU)に選定されています。海岸という限られた環境に生育するハマナツメはもともと希少なうえ、海岸の工事などの環境の改変や自然の遷移で生育に適した環境が少なくなっており、絶滅の危機が増大していると考えられています。(前田 哲弥)

No. 250
地 学

フウ(台湾フウ)の化石 *Liquidambar formosana*

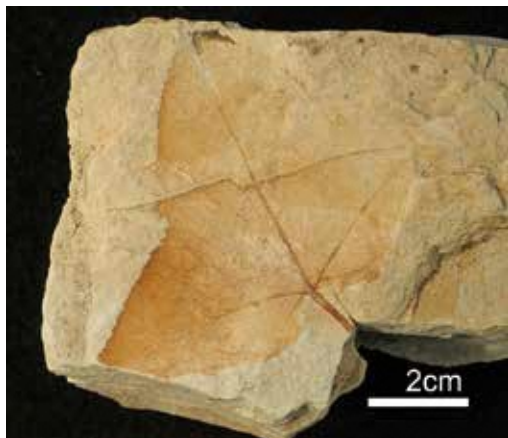


図1 フウの化石

標本と比べてみると、全体の形や葉脈の特徴などから、フウの葉の化石であることがわかります。

フウのなかまは、約1億年前に現れ、約1000万年前には北半球に広がっていました。日本でも約800万年前の地層から数種類のフウの化石を産出しています。しかし、約260万年前から氷河期に入ると、寒冷化によって分布域が狭まり、種類も減りました。日本では、氷河期に入ると姿を消してしまいました。

フウの化石は、この植物がかつて熊本でも自生していたことを示しています。(廣田 志乃)

外国から日本に持ち込まれた植物の中には、かつて日本に自生していたものがあります。フウの仲間もその一つです。

フウは台湾フウとも呼ばれる中国南部や台湾原産の樹木で、18世紀はじめ頃の江戸時代に日本に持ち込まれ、庭木や公園の木、街路樹として植えられています。葉の先端は3つに分かれ、手のひらのような形をしています。漢字では「楓」と書き、葉の形がカエデのなかまに似ていますが、違う植物のなかまです。

図1は山鹿市鹿北町で産出した葉の化石です。約300～400万年前に湖で堆積してできた地層から産出しました。図2の植物



図2 フウの標本

No. 251
民 俗

天秤棒

人の力で物を運ぶ方法には手で持つ、背負うなどがあり、少ない力で運べるように様々な道具が工夫されてきました。肩に担いで運ぶときには、長い棒に荷物を下げる方法が広く行われていました。大きなものや重いものは、棒の中央に荷物を下げ、前後を二人で担いで運んだりしますが、一般的に行われていたのは、棒の中心部を肩に担ぎ、棒の両端に桶や籠などを吊り下げて一人で運ぶ方法で、これには天秤棒という道具が使われていました。天秤棒という呼び名は主に東日本で使われていたものです。熊本県では担ぐことをニナウ・イナウという事からニナイボウ、イナイボウと呼ぶところが多いようですが、ほかにもロクシャク、ボクトウ、サシなど、様々な呼び名が使われていました。



天秤棒（上益城郡甲佐町）

写真は上益城郡甲佐町で大正時代から昭和中期まで様々な荷物の運搬に使われていたもので、モッコボウと呼ばれていました。写真では分かりづらいのですが、160cm ほどの棒はやや平らに削られており、中央部の肩に当たる部分はやや太くなっています。材は不明ですが、一般には^{むく} 椋や杉など弾力性のあるものがよいとされています。これらはなるべく疲労少なく運ぶための工夫です。両端にある突起は吊り下げる荷の縄の滑り止めですが、特に水桶やバケツを運ぶ時には、^{またぎ} 股木や^{かぎ} 針金の鉤をつけた縄を両端に下げた専用の天秤棒を使うこともありました。（迫田 久美子）

No. 252
動 物

ユビナガコウモリ *Miniopterus fuliginosus* （ヒナコウモリ科）



図1 ユビナガコウモリ標本
（五木村産）

ユビナガコウモリ（図1・2）は、出産および、^{ほいく} 哺育、冬眠、休息を洞窟で行う洞窟性コウモリの一種です。複数の洞窟を季節的に使い分けていますが、本種が利用できる洞窟にはある程度の広さが必要なようで、限られた洞窟に多数の個体が集まります。他のコウモリと比べて細長い^{つばさ} 翼が特徴で、この翼によって、ときに数百 km にも及ぶ長距離の季節的移動を行います。

熊本県では、球磨郡球磨村の^{おおせどう} 大瀬洞や五木村の^{つづらせどう} 九折瀬洞が九州でも最大規模の冬眠場所として知られていますが、前者は昨年7月の豪雨により^{じんだい} 甚大な被害を受けた地域であり、後者もまた、その豪雨により再燃したダム計画によって洞窟が水没の危機に^{さら} 晒されています。

「レッドデータブックくまもと2019」では本種は準絶滅危惧となっていますが、主要な生息地を取り巻く状況が発刊後に大きく変わったことから、今後の動向に注意が必要な種と言えるでしょう。

図1の標本は、1999年に九折瀬洞で採集されたものです。これからも熊本県の洞窟にたくさんの本種が変わらず見られることを願ってやみません。（中園 洋行）



図2 冬眠中のユビナガコウモリ（五木村）

No. 253
歴史

書簡（高森町瀬井家資料）

この資料は、甲斐有雄^{かいありお}へ宛てて長野一誠^{ながのいっせい}から送られた書簡（図1）です。内容は、甲斐有雄の道標建設に対して感謝を述べたもので、長年にわたって南郷地域^{なんごう}（現在の南阿蘇村・高森町）に数百の道標を建設したことによって人々の行き来が便利になったので、謝礼として目録の品物を贈る、と書かれています。目録（図2）は別に作られ、金3円と裕1枚が贈呈品として記されています。



図1 書簡

宛名にある甲斐有雄は阿蘇郡尾下村^{おくだりむら}（現・高森町）出身で、石工として生計を立てる傍ら、複雑に道が入り組む阿蘇郡において、交通の便を図って石道標を建設したことで知られています。石道標の建設は文久元年（1861）からおおよそ50年にわたって続けられ、その数は明治41年（1908）には1900基に達したといわれます。また、建てられた場所は阿蘇郡にとどまらず、飽託郡、上益城郡のほか、大分県や宮崎県にも広がっています。この功績から、昭和33年（1958）に熊本県近代文化功労者に選ばれています。

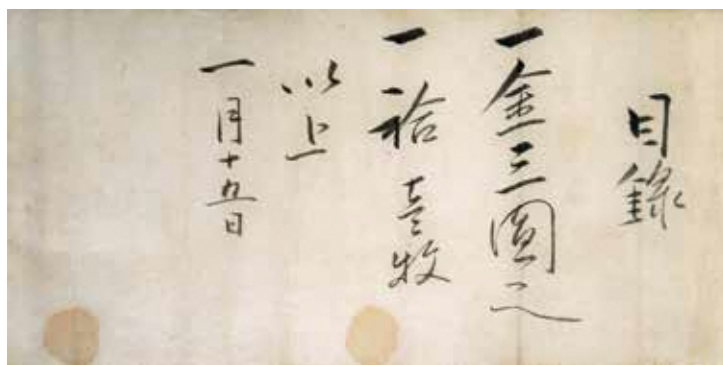


図2 目録

送り主の長野一誠は阿蘇郡久木野村（現・南阿蘇村）出身で、南郷地域の産業開発、地域振興に貢献した人物です。私財を投じて学校を建設し、阿蘇商社の創設による実業の振興を図り、また養蚕の奨励による副業の増進や、米穀品評会の開催、織物工場の設立による経済振興に努め、とりわけ戸下^{とした}（現・南阿蘇村河陽）を通して南郷と熊本を結ぶ道路の建設に尽力しました。長年にわたる地域振興への貢献から、明治25年（1892）に藍綬褒章^{らんじゅほうしょう}を受け、昭和43年（1968）に熊本県近代文化功労者に選ばれました。

甲斐有雄の道標建設は、熊本藩や熊本県から複数回にわたって褒賞されていますが、この資料から、地元の南郷地域においても評価を受けていたことがわかります。（古澤 広大）

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302

E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

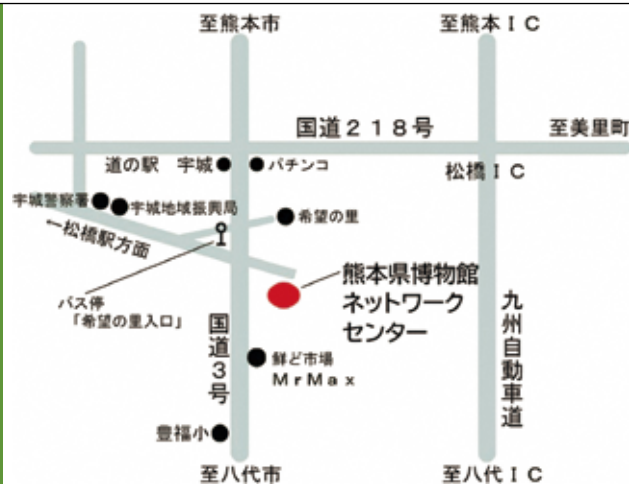
○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由

八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km



熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2021年7月21日



No. 49

イベント情報（令和3年8月～令和3年10月）

企画展 会場：熊本県博物館ネットワークセンター 入場無料

第1回企画展 「円のあゆみ ～近代通貨制度の150年～」

明治時代から現代にかけて発行されたお金を展示し、その変遷を制度や社会の変化とあわせて紹介します。

○開催期間 令和3年6月8日（火）～8月9日（月）



第2回企画展 「教科書に登場する動物たち」

学校で使用されている教科書に登場する動物たちを、当センター所蔵の標本を用いて紹介します。

○開催期間 令和3年8月17日（火）～10月17日（日）



フクロウ

タガメ

フィールドミュージアムに飛びだそう！

県内のさまざまな場所で自然観察会を行います。熊本の豊かな自然に触れてみませんか。

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
夏の星空を楽しもう	熊本市南区 城南町 県民天文台	9月3日（金） 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡で、夏の星座や星の観察を行います。	8月9日～ 8月20日
植物体感ウォーク	宇城市豊野町	9月11日（土） 10:00～12:00	20名	植物のいろいろな特徴を体感します。	8月16日～ 8月27日
白亜紀の化石を探そう	上天草市 櫛島	9月19日（日） 13:30～15:30	20名	本物の地層と化石を専門家の解説で見学します。	8月23日～ 9月3日
水辺の生き物を観察しよう	菊池市七城町 鴨川河畔公園	9月25日（土） 13:00～15:00	20名	水中の生き物を観察します。	8月30日～ 9月10日
月の観察と写真撮影をしよう	熊本市南区 城南町 県民天文台	10月15日（金） 19:30～21:30	60名	天体望遠鏡で月の観察をしたり、写真を撮影したりします。	9月20日～ 10月1日

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：参加希望プログラム名、参加者全員の住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、往復はがきまたはメールで、博物館ネットワークセンターへお申込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。
（往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。締切必着。）

記載されている行事は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況や災害等により、日程や募集人員が変更になる場合があります。詳細は当センターにお問い合わせいただくか、ホームページで御確認ください。

No. 254
歴史

こくりつぎんこうしへい
国立銀行紙幣旧 1 円券（西崎俊秋寄贈資料）

本資料は、明治政府が金本位制度のため、^{だかんしへい}兌換紙幣（本位貨幣と交換が保証されている紙幣）を発行する必要性があったことから、民間の国立銀行によって発行された横長型紙幣です。この紙幣は、明治 5 年（1872）に国立銀行条例を制定したことがきっかけとなり、アメリカの企業であるコンチネンタル・バンクノート・カンパニーが製造し、翌 6 年（1873）から 1 円・2 円・5 円・10 円・20 円の全 5 紙幣が発行されました。

この紙幣には、兌換文言・公債証券引当文言・法貨表示文言・^{みなもとのためとも}偽造罰則文言が券面に印刷され、表面には、^{かみつけ}源 為 朝 又は ^{のたみち}上毛 野田道と考えられている人物と兵船の図案、裏面は、^{げんこう}元寇の様子を描いた図案があります。他にも「武蔵 東京 第十五国立銀行」や「頭取 ^{もうりもとのり} 毛利元徳」とあることから、明治 10 年（1877）に開業した第 15 国立銀行（現在の三井住友銀行）が発行した紙幣ということがわかります。

国立銀行は、第 153 銀行までが各都道府県に散在し、熊本県内では、「第 9 銀行」（熊本市）、「第 135 銀行」（宇土市）、「第 151 銀行」（熊本市）が開業し、その中の第 135 銀行は現在の肥後銀行の前身となります。

現在の銀行につながる国立銀行が発行した本資料は、令和 3 年度に開催される企画展示「円のあゆみ～近代通貨制度の 150 年～」に出品していますので、ぜひ実物をご覧ください。（堤 将太）



図 1 国立銀行紙幣旧 1 円券（表面）



図 2 国立銀行紙幣旧 1 円券（裏面）

No. 255
地学

シノブ石（忍石）

今回紹介する 2 つの岩石には、シダの葉のような模様があります。これらはシダの葉の化石でしょうか？

2 つの岩石は、リソイダイトという、マグマが冷えて固まった岩石が熱水で変質したものです。そのため、化石を含むことはありません。これらの模様は化石ではなく、岩石の割れ目に水がしみ込み、その水に含まれるマンガンや鉄の酸化物が沈着してできたものです。図 1 はマンガンの酸化物、図 2 は鉄の酸化物が沈着してできました。このような石は、模様がシノブというシダの仲間に似ていることから、「シノブ石」と呼ばれます。

一見すると化石のようなのに化石ではない石を、^{ぎかせき}偽化石といいます。^{ぎかせき}偽化石は、生物とは無関係なのに、形や構造がある種の生物に似ているため、化石と間違われます。シノブ石は^{ぎかせき}偽化石を代表する石です。

これらは、天草郡苓北町都呂々および富岡半島で採取しました。リソイダイトは天草陶石や天草砥石の材料となる岩石です。天草下島では苓北町から天草市天草町にかけてリソイダイト^{がんみやく}岩脈が分布しています。海岸で白っぽい石ころをよく見てみると、シノブ石が見つかるかもしれません。（廣田 志乃）



図 1 シノブ石（マンガンの酸化物）



図 2 シノブ石（鉄の酸化物）

No. 256
民 俗

せおいはしご
背負梯子

木杵に荷物をくくりつけ、背負って運ぶ道具です。荷をのせる横木(爪)のある有爪型と、爪を持たない無爪型に大きく分類されます。無爪型は東日本に多く、熊本県ではほとんど見られません。有爪型には股のある自然木を利用したものもありますが、多くは写真の資料のように材を組んで作られました。また、背に当たる部分に縄を巻いたり、わらの背当てをつけたりすることが多いようです。

背負梯子は木製のため丈夫で、荷物が固定されて運びやすいことから、山間部の狭い山道で、椎茸の原木、薪、木炭など、重くてかさばる荷物を運ぶのに適していました。県内での分布はやはり平野部に少なく山間部に集中しています。

ところで、背負梯子という呼び名は関東地方で使われるもので、県内では背負うことを「おう」あるいは「からう」ということから、オイコ、カライなどと呼ばれていました。ちょっと変わった呼び名に、天草地方のウエ、チゲ、緑川上流域のトウジンカライというのがあります。ウエについ

てはよく分かっていませんが、長崎県の五島列島や平戸あたりでもこう呼ばれるようです。チゲは韓国の背負梯子の呼び名で、天草のものと形態が似ています。中国にも似たような道具があることから、これらの地域には大陸から伝わったものが広まったと考えられます。(迫田 久美子)



現地呼称：オイコ
使用地：南小国町

No. 257
動 物

ミゾゴイ *Gorsachius goisagi* (サギ科)



図1 ミゾゴイ幼鳥標本(山都町産)

ミゾゴイ(図1・2)は全身が赤茶色の羽毛で覆われた、ほぼ日本のみで繁殖している、世界的に希少なサギの一種です。熊本県では夏鳥として、毎年少数が東南アジア方面から飛来し、ごくわずかな繁殖記録が知られています。湿潤な森林に生息し、ミミズ類やサワガニ、昆虫などを捕食しているようですが、元々個体数が少ない上に人目に触れにくい環境であるため、まだ生態に不明な点が多いようです。

本種は「環境省レッドリスト2020」では絶滅危惧II類、「レッドデータブックくまもと2019」では絶滅危惧IB類とされていますが、後者の解説からは個体数の変動についても把握が難しいことが読み取れます。

図1の標本は、1990年7月22日に上益城郡清和村(現・山都町)で拾得されたものです。翼や頭部に細かい白黒の虫食い斑が目立ち、くちばしや脚の黄色みが強いことから、幼鳥であることが分かります。拾得に至るまでの経緯は不明であるものの、時期的に県内で生まれた個体である可能性が高く、繁殖を窺わせる貴重な資料と言えます。(中園 洋行)



図2 ミゾゴイ成鳥生態写真(八代市泉町)

No. 258
植 物

ハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* (ウルシ科)



図1 ハゼノキ
a: 並木(熊本市北区龍田) b: 雄花(宇城市松橋町)

ハゼノキ(図1)は、その果実に多量の^{ろう}蠟を含み、人々の生活に利用されてきました。かつて熊本藩が栽培を奨励し、^{ろう}蠟を特産品として藩外に輸出していたことはよく知られています。

また、ハゼノキはかぶれ(接触性皮膚炎)をおこす植物としても知られています。ハゼノキだけでなく、同じウルシ属のツタウルシ、ヤマハゼ、ヤマウルシ、ウルシなどでも、さわったり、樹液

がついたりすると皮膚炎になります。敏感な人は木の下を通ただけで反応することもあります。これらの樹木の樹液に含まれるウルシオールという物質が、皮膚への刺激性をもち、皮膚炎の原因となっているためです。上記のウルシ属植物の中でウルシ以外は熊本県内に自生しています。野外活動の際には、さわらない、近づかないなど注意が必要です。また、ウルシオールは、分子同士が^{じゅうごう}重合して固まるという性質があります。この性質を利用して、ウルシの樹液を塗料として塗布した道具類が漆器です。

ハゼノキの遺伝的多様性の分析などから、本州・四国・九州のハゼノキには、古くから自生していたものと、江戸時代に琉球列島や中国大陆から持ち込まれたものの両方があると推論されています。であるとする、熊本県内にも植栽されたハゼノキと自生のハゼノキの両方が生育しているのかもしれません。図2の標本は、1931年に熊本市の江津で採集されたものです。ラベルにcult. (cultivated: 栽培された、の略)とあることから植栽されていた木であることが分かります。図3の標本は1986年に熊本市の神園山で採集されています。ラベルには「山麓」の表記があり、自生のハゼノキである可能性があります。しかし、熊本県内



図2 ハゼノキの標本
(1931年熊本市江津, 栽培)



図3 ハゼノキの標本
(1986年熊本市神園山)

で植栽由来と自生のハゼノキがどのように分布しているのか、これらがどのように関わり合って生育しているか、などははっきりしていません。多くの標本とその情報を蓄積することが、ハゼノキの秘密を解き明かすヒントになるかもしれません。身近な植物であっても、時代や場所を変えて標本を作り、保管し、蓄積することは、自然の姿を探究する自然科学において大きな意義があります。(前田 哲弥)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302

E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由

八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km



熊本県博物館ネットワークセンターだより 熊本の自然と文化

編集・発行 熊本県博物館ネットワークセンター
2021年11月10日



No. 50

イベント情報（令和3年11月～令和4年2月）

企画展

会場：熊本県博物館ネットワークセンター

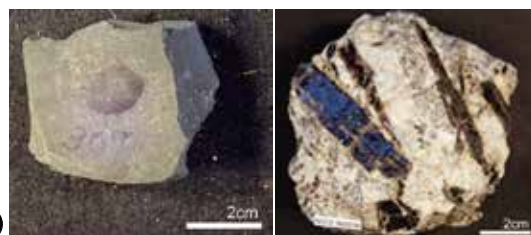
入場無料

第3回企画展

「くまもとの地質（宇城市周辺の地質）」

地質の紹介を通して、熊本の土地の成り立ちや生活とのかかわりについて関心をもてる展示です。今回は宇城市周辺にスポットを当てて紹介します。

○開催期間 令和3年10月26日(火)～12月26日(日)



キララガイの化石

ペグマタイト
(巨晶花こう岩)



昨年度の展示の様子



第4回企画展

「ちょっと昔の暮らし探検」

小学校3年生の社会科で学ぶ道具を中心に、昔懐かしい暮らしの様子や仕事の道具を一堂に紹介します。

○開催期間 令和4年1月10日(月)～3月13日(日)

フィールドミュージアムに飛びだそう！

県内のさまざまな場所で自然観察会を行います。熊本の豊かな自然に触れてみませんか。

プログラム	場所	日時	定員	内容	申込期間
水辺の冬鳥を観察しよう	熊本市 江津湖	2022年 1月22日(土) 10:00～12:00	20 名	クロツラヘラサギなど、江津湖にやってくる鳥を観察します。	12月20日 ～1月7日

対象：幼児～一般 ※小学校3年生以下は保護者同伴

申込み方法：参加希望プログラム名、参加者全員の住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、往復はがきまたはメールで、博物館ネットワークセンターへお申込みください。申込み多数の場合は抽選で参加者を決定します。
(往復はがきで申込みの場合は、返信用はがきに住所・氏名を記入してください。締切必着。)

記載されている行事は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況や災害等により、日程や募集人員が変更になる場合があります。詳細は当センターにお問い合わせいただくか、ホームページで御確認ください。

～ご来館の皆様へのお願い～

- 入館の際はマスクの着用をお願いします。
- 入館時に、設置している消毒液による手指の消毒をお願いします。
- 氏名・連絡先、健康状態の記入をお願いします。※感染症拡大防止策以外の目的では使用しません。
- 館内では、周囲の人と2m程度の間隔を取ってください。
- 展示室の最大人数を10人程度とするために、入場をお待ちいただく場合があります。

No. 259
植 物

ナンゴクウラシマソウ

Arisaema thunbergii subsp. *thunbergii* (サトイモ科)



図1 ナンゴクウラシマソウの
標本(2015年宇土市)

矢印は系状に長く伸びる付属体。ジウムパートナーズクラブ雁回山の植物を観る会」の活動で得られました。当センターにはそれまで雁回山産のナンゴクウラシマソウの標本はなかったため、とてもありがたい出会いとなりました。

テンナンショウ属植物はとても魅力的な外観をしていますが、不用意に手を触れないほうが無難です。テンナンショウ属をはじめとするサトイモ科植物の多くは、ヒトにとって有毒で皮膚炎や食中毒を起こすシュウ酸塩を多く含んでいます。料理で里芋の皮をむいて手がかゆくなる原因と同じです。野外で出会ったとき、素手でちぎったり、ましてや口に含むようなことがないように注意しましょう。(前田 哲弥)

春の野山で出会って誰もがちょっと驚いてしまう植物の一つが、サトイモ科テンナンショウ属の植物です。^{ぶつえんぼう} 仏炎苞とよばれる葉的器官で包まれた花序が、鎌首をもたげた蛇を思い浮かばせます。短いトウモロコシの様な形に集まった果実は秋に熟します。その姿も見た人を驚かせます。

図1の標本は、このテンナンショウ属植物の一つ、ナンゴクウラシマソウです。和名の「ウラシマ」は、日本の昔話「浦島太郎」に由来するという説があります。花序軸の先端(付属体)が糸のように長く伸びており(図1, 2の矢印)、これを浦島太郎の釣り糸に例えたようです。この標本は、当センター

を拠点に活動するボランティアグループ「ミュー



図2 開花期のナンゴクウラシマ
ソウ(2015年宇土市)
花序は紫色の仏炎苞につつまれる。
矢印は系状に長く伸びる付属体。

No. 260
民 俗

かつぎまた 担 股

担股は、ネムノキやヌルデなどの、枝がY字に分かれた股木を二つ用いて作った運搬具です。Y字の間に薪や木炭、稲わら、刈草などをのせ、股に固定した台木を肩に担ぎ、2本の支柱を前後にして両手に握り、バランスをとりながら運びます。県内ではカタゲ、キカタゲなどと呼ばれ、球磨地方の山間部などで使われていました。全国的には紀伊半島、四国山地、九州山地などで確認されています。あまり知られていない道具ですが、炭焼技術の伝播と関わることから注目される道具です。

近世になると都市が発達し、家庭での木炭消費が増え、各地で製炭が盛んとなります。中でも和歌山、高知、鹿児島などは、豊富な資源に加えて良質な炭を作る技術に優れ、さらに江戸、大阪への海上輸送の地の利があったことから木炭の一大産地となりました。やがて、これらの地の技術者が、炭材を求めて自ら渡り歩いたり、雇われたりして全国に移動していききました。宮崎県の東郷町では担股は高知の炭焼が、西米良村では和歌山の炭焼が伝えたといわれているそうです(泉房子著『民具再見』鉾脈叢書1980)。

熊本県内では、明治以降、和歌山、高知、大分、鹿児島などから来た人達が、林業や炭焼などの山仕事に従事していたことが知られています。担股の分布を読み解くことで、県内での炭焼文化の伝播などを明らかにする手がかりとなるかもしれません。(迫田 久美子)



現地名 カタゲ
使用地 球磨郡多良木町黒肥地
昭和20年頃から60年頃まで使用

No. 261
地 学

三角岳

三角岳は宇土半島の西端部に位置する標高 405.7m の山で、約400 万年前の火山活動でできた溶岩ドームです。約300～400 万年前、宇土半島の西端から大矢野島では火山活動が活発で、いくつもの火山ができました。三角岳はその中の一つです。三角岳をつくる溶岩は、粘り気が強かったため、流れずに溶岩ドームを作りました。

図 1 は三角岳の溶岩ドームをつくっている角閃石安山岩という岩石です。全体的に灰色で、黒く細長い粒（角閃石）がた

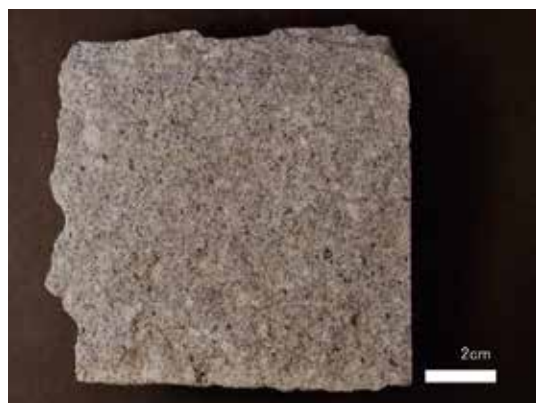


図 1 三角岳の岩石

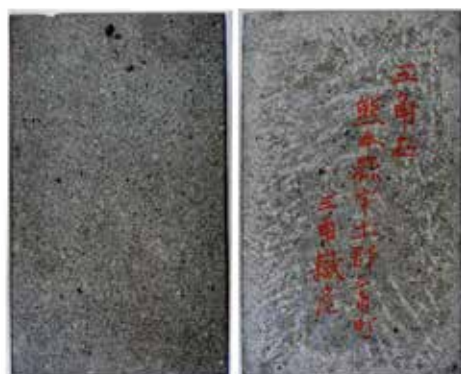


図 2 天覧石材標本「三角石」
裏面には石材名と産地が書かれている。

くさん散りばめられ

ています。また、大きめの白い粒（斜長石）が斑点のように見られます。これらは、火山から噴出した溶岩が冷え固まってできた岩石の特徴で、斑状組織といいます。

三角岳の北麓や西麓の一部は崖が海岸に張り出しており、そこには数箇所の採石場があります。三角岳の石は昔から石材や碎石として利用されており、昭和 6 年の昭和天皇の熊本行幸では、三角岳産の「三角石」が 12 個の県内産石材とともに天覧に供されました（図 2）。（廣田 志乃）

No. 262
歴 史

郵便切手貯金台紙（熊本市米村家資料）



図 1 表紙

日本に郵便貯金の制度が登場したのは明治 8 年（1875）のことです。イギリスの制度に倣って採り入れられ、一般の国民に貯蓄をさせることで社会保障としての機能が期待されました。しかし、日清・日露の戦争のあとに、政府の財政や産業振興に大量の資金が必要になると、貯金はその財源として注目され、強く奨励されるようになります。しかし、当時の貯金制度では 10 銭以上でなければ預け入れができませんでした。そこで、子供の小遣い銭でも貯蓄の対象にするために始まったのが切手貯金の制度です。5 厘や 1 銭などの小額の切手で貯金ができるようになりました。

本資料はそのような貯金奨励の一環で作られたもので、切手を使って貯金をするための通帳です。図 1 は 5 厘切手

用の台紙で、図 2 のように全ての枠に貼り付けたあと、郵便局へ持っていくと 10 銭の貯金として預け入れることができました。地域によっては、この台紙を使用して小学校で集団的に貯蓄が行われたこともあり、若年層への貯金制度や貯蓄の概念の普及に大いに役立ったようです。

（古澤 広大）



図 2 内側

No. 263
動物

ニホンイシガメ *Mauremys japonica* (イシガメ科)

ニホンイシガメ(図1, 2)は、本州、四国、九州と、それらの周辺離島に分布している日本固有の淡水ガメの一種です。甲羅が全体的にごつごつしていて、その後縁がギザギザになっていること、四肢が黄色く縁どられることなどが大きな特徴で、水のきれいな川や池、水路などに生息しています。縁起物として江戸時代以前から人々に飼育され、親しまれてきた存在ですが、近年では「環境省レッドリスト2020」、「レッドデータブックくまもと2019」のいずれにおいても準絶滅危惧とされ、簡単には出会えない種になってしまいました。減少の原因として、水辺のコンクリート護岸化、ペットとしての乱獲、アライグマによる捕食、アカミミガメ(図3)やクサガメ(図4)といった外来淡水ガメの侵入による生息場所の圧迫などが挙げられています。さらに、本種とクサガメとは簡単に交配して雑種をつくり、遺伝子汚染が進んでいることも大きな問題となっています。図5の個体は当センターに隣接する池のほとりで確認されたもので、甲羅のごつごつした感じや四肢の黄色い縁取りなどニホンイシガメの特徴を持っていますが、ニホンイシガメにしては甲羅がやや滑らかで、不明瞭ながら甲羅に3本のキール(隆条)と頬に黄色い筋模様が入り、クサガメの特徴も持っています。こんなに身近なところでも、既に遺伝子汚染が進行しているのです。



図1 ニホンイシガメ標本
(宇土市産)



図2 ニホンイシガメ
(宇城市)



図3 アカミミガメ(阿蘇郡高森町)



図4 クサガメ(宇城市)



図5 ニホンイシガメとクサガメ
の雑種(宇城市)

図1のニホンイシガメは、宇土市で採集されたものです。この場所では今のところアカミミガメやクサガメは見られず、比較的安定して本種を確認することができますが、すぐ近くにクサガメの生息地があり、安泰とは言えない状況です。日本が誇るこの美しい淡水ガメが見られる水辺を、いつまでも大切に守っていききたいですね。(中藺 洋行)

熊本県博物館ネットワークセンター

〒869-0524 宇城市松橋町豊福 1695

TEL: 0964-34-3301 FAX: 0964-34-3302

E-mail: hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

HP: <https://kumamoto-museum.net/kmnc/>

[公共交通機関]

○九州産交バス

松橋バスターミナルより宮原経由

八代産交行き「希望の里入口」下車

○JR

松橋駅より約 3 km

